

7. ¹⁹⁸Au コロイド肝スキャンパターンと病名との関連性について

壹岐 尚生 西村 新吉 西村 早苗
(島根県立中央病院 放射線科)

われわれの科に昭和46年7月、RI 検査棟の開設が認められた。それ以来 RI 診断を手がけて、9カ月になる。ここで ¹⁹⁸Au コロイド肝スキャンのパターンと病名との関係を検討したので報告する。症例数は100余例で、手術等にて肝に肉眼的に異常を認めないものを標準パターンとして、これと比較検討した。1) 異常パターンを18パターンに分類して疾患名と対比した。2) 肝正常の場合は必ず標準像を示すが脾出現をみるときは肝障害がある。中等度脾出現の70%は肝硬変である。3) 原発性の肝癌は欠損像で示現できるものが多かった。このことは検出しやすいほどの進行癌が多かったと考える。4) 転移性のもは、かなり大きくならないと出現しないことがあるので注意する必要がある。5) 内臓反転症の肝スキャンパターンを紹介した。

*

8. 肺癌の肺シンチグラムの臨床的評価 —とくに肺機能の補助的手段として—

勝田 静知
(広島大学 中央放射線部)
佐々木正博 河面 博久 佐々木英夫
(同 第2内科)

高年者層に多発する原発性肺癌の手術適否を決定する場合、肺機能検査は重要な検査法であるが、現在一般に実施されている肺機能検査法は肺全体としての機能を測定する検査であって、局所性肺機能を求め得ないという欠点がある、かかる見地より本症患者に対しては一般肺機能検査の他に ¹³¹I-MAA, ¹³³Xe などによる局所性肺機能の検討を併せ行なっているが、今回は ¹³¹I-MAA による肺血流スキャンで得られた肺シンチグラムが一般肺機能検査の補助的手段としていかなる有用性があるかを検討する目的で、胸部X線所見とも対比しながら両者の比較検討を試みた。その結果、肺シンチグラムは肺機能検査と併用することにより、ときどき合併する慢性閉塞性肺疾患の病変部位の把握や、肺門型肺癌および一部の進行した肺野型肺癌の治療方針ならびに予後を決定す

る上の一指標として意義あるものであることを認めた。
質問： 佐光 正一(高知市民病院 放射線科)
肺レ線像と肺スキャンの所見と比較して、スキャン像より予後の判定ほどの程度あったか。

答： 勝田 静知(広島 中央放射線科)

肺シンチグラムで得られる3つのパターンの中I型は病巣部以上の陰影欠損を呈しているが、これはこの領域の血流減少を示すものであって、その成因としては腫瘍そのものによる血管の圧迫のみならず、血管壁への浸潤という場合もあるので、かかるパターンのシンチグラムは治療方針選定や予後判断の上の一指標になるものと考ええる。

*

9. 放射線治療を行なった子宮癌患者の腎シンチレノグラム

桜井 孝 横山 敬 小林 光昭
(山口大学 放射線科)

子宮癌の治療には、放射線治療、あるいは手術、またはこれらの併用が考えられるが、いずれの場合も、泌尿器系への影響が問題となる。われわれは、放射線治療を行なった場合の変化を知る手段として、照射前、6000 rad 照射後、および経過観察時に各々レノグラム、腎シンチグラムを行ない、時に IVP を施行して、拡射線治療と進行期および手術との相互関係を、検討している。再発3例、Ⅲ期7例、Ⅱ期4例、Ⅰ期4例の合計18例について検討したところ、症例は少ないが、照射後のレノグラムにみる腎機能の変化は4カ月以降に出現しており、12カ月間不変のものもある。このことから経過観察は1年以上を必要とするように思える。また高度な変化を示しているものは、すべてⅠ期、Ⅱ期で手術を行なったものである。また症例数に不足しているため、今後とも治療による腎および尿管障害について経過を追求してゆかねばならないと思う。

質問：Ⅰ 鴛海 良彦(広島日赤病院 放射線科)
拡射線治療の際、腎ぞう部が照射野内に入っていたのかどうか。

Renogram, Renoscintigram は放射後治療前にもとっているのか。というのは手術による直接浸襲も考えられるので。

質問：Ⅱ 藤原 寿則(徳大 放射線科)
外部照射時照射野内に入る尿管の長さとその線量は?